

大田洋子論・序説

— 〈原爆作家〉としての神話／からの逸脱 —

亀井千明

いわゆる〈原爆〉やそれに関わる文学的表象に対する研究の場からのアプローチは、近年活発なものとなりつつあるといつてよい。— そういった状況下において、本稿が〈原爆作家〉の代表的存在として、数々の〈原爆文学〉を著したとされる「大田洋子」を、批評の俎上に載せようとする目的について、明らかにしておく必要があると思われる。なぜなら近年の研究動向を見る限り、〈原爆文学〉や〈原爆作家〉といった既存の枠組みを自明のものとしながら、そこで認定されたある特定の作家を論じる段階ではないということ、それよりも〈原爆〉の記憶や〈原爆文学〉を語る言説自体を分析の対象としている傾向が看取できるからである。大田は、長岡弘芳（『原爆文学史』、風媒社、一九七三・六）・黒古一夫氏（『原爆とことば（抄）』、三一書房、一九八三・七）等により構築された〈原爆文学史〉なるものにおいて、〈史の祖〉として配置された。いわば〈原爆文学〉の起源としての位置付されたと換言出来る。この彼女を〈祖〉たらしめた理由として、被爆体験を文学化し、伝えようとする「使命感」を持っていることにより、そういった姿勢は特に「屍の街」の序に顕在しているという。こういった、長岡・黒古の解釈枠は、現在広く共有されているよ

うにも見受けられる。毎年八月になって— つまり八・六及び八・九に合わせて— 各メディアで急激な増加を見せる〈原爆文学〉に関する特集で、必ず取り上げられる大田の作品（その殆どが「屍の街」が、被爆体験の恐怖に怯えながらも、必死にそれを書きとめたといった一様の見方が附されているのが確認出来ることからも）。

こういった大田への位置付けは、各々が想定する〈原爆作家〉に大田をあてがっただけであり、実体的な作家とは程遠いところで、理想的な〈原爆作家〉としてのイメージが生成され続けたといつてよい。しかし理想視された大田こそ〈原爆〉や〈原爆文学〉という既存の枠組みに対して、問題提起しうる誘発的な存在ではないだろうかと考えているのだが、本稿ではそれを、継続して大田の評価を行ってきた江刺昭子の批評言説を一つの手掛かりとし、その評価の変遷を辿ることで、大田という存在がいかなる問題を提起しうるのかを探ってみたい。

第十二回田村俊子章を受賞した『草鱧 — 大田洋子評伝』（講書房、一九七一・八）は、江刺にとつては初めての大田評価の試みである。本書における江刺の批評スタンスは、「感傷ではなく、洋子の三十五年の作家生活を辿り、その最も豊かな結晶である原爆作品を再評価」にある。しかしながら、大田を「女主人」と呼び、晩年の一時期寝食を共にした近しい者としての「感傷」が確実に入り混じっていることは間違いないようで、そして何より江刺を終始同情的な立場から大田の再評価へと向かわせたのには、評伝中繰り返し触れられる大田自身への、そして大田が書く原爆

に關する作品に対する非難及び否定的言説が蔓延していた事にも
拠る。興味深いのは、それらの言説が噂などの風評の粹に止まる
ものも少なくないということで、それだけに江刺の否定評払拭の
試みは、困難を極めているように見受けられる。それは姿なき非
難の声と格闘するわけであるから！

漠然としていた大田の原爆に關わる作品への否定的言説に対し
て、明確な理由付けを行なったのが、一九七八年七月栗原貞子「悲
運の作家大田洋子への傷み」（『現代の眼』）であるといえよう。こ
の中の「洋子の戦争責任」と題される章の中で、「洋子の原爆文
学に対して文壇の人たちが冷やかだつたのは、戦争中良心的な作
家が筆を折っている時、皇軍慰問のため中国に行き二カ月も慰問
旅行したり、戦争協力のエッセイや小説を華々しく新聞や雑誌に
発表し、何冊もの単行本を戦時下に出版したりした彼女が、戦後
は戦争の被害者として、原爆の苦悩を書いたことに対する不信だ
つたのではないか。」と指摘している。栗原が大田へ突きつけた
問題意識は、戦局に迎合した作家活動を行なっていた加害者とし
ての側面を持ちながらも、被爆したという被害者としての側面を
語っているという、いわば偶然にも大田が抱えてしまった（二面
性）に対するものである。もちろん、この栗原の指摘が真実を語
っているわけではない。しかし、同じ被爆者からの、被爆体験を
語るものとしての一貫性を求める声は、その後力ある言説となり
得た。それは江刺の評伝以後の大田評価の方向性を辿ることで明
らかにできよう。

一九八四年八月『国文学 解釈と鑑賞』における〈特集・原爆

文学〉に寄せられた「大田洋子論」で江刺は、「原爆主題をより
深めるためには、感情的な反撥だけでは不十分で、思想的な裏づ
けが要求されるのは確かだろう」とし、そのために必要なものと
して「自身の戦中の言動の点検」といった、それまでとは一転し
て大田の戦中時代へと眼差しを向け、反省を促していることが確
認できる。ここには先に挙げた栗原の発言の影響が見取ることが
出来る。それは評伝においては、殊更非難も行わず「生活の
為だった」という弁護に止まっていた江刺の批評姿勢が一変した
のだから。更に、一九九六年八月に発表された「大田洋子再読」
（『女がヒロシマを語る』、インパクト出版会）では、大田の代表的
な国策文学とされる「桜の国」について触れ、「明らかに戦争遂
行に加担したと読める作品もあるが、ひつくるめていえば、戦争
中の作品における大田の戦争への態度はむしろ冷静である。とい
うより、戦争そのものにはそれほど強い関心を示さず、先にも触
れたように銃後の人々の暮らしをたんと描くことに力を注い
でおり、それらは戦意昇揚に役立つとはとても思えないし、消極
的ながら厭戦的な作品もある」といった見方を示すことで、今度
は加害者側に立っていた事実をも覆そうとしていることが窺え
る。続いて二〇〇〇年一月『近代女性作家精選集042 大田
洋子「桜の国」』（ゆまに書房）の発刊に寄せた「銃後小説の代表」
というエッセイでは、「国策をストレートにはなく、恋愛小説
というオブラートに包んで一般に浸透させようとした政府の意図
をみごとにすくいあげた作品が『桜の国』なのである。」という

ように、作中言説の分析を具体的に行なうことによつて、大田の
作家的手腕を評価しつつ、そこで少なからずあつた反戦的姿勢の

強調を行なおうとしている。こういった江刺の批評傾向は、一八八四年の「大田洋子論」でいったんは「自身の戦中の言動の点検」を大田に欠けたものを認めながらも、翻つて戦局に非積極的だった大田像の再浮上を試みることで、栗原の発言を払拭しようと懸命であることが受け取れる。

自らが被爆した身でありながらも、被害のみを訴えるのではなく、加害の側面も問うべきだという、栗原の言説図式は、一九七二年発表の「ヒロシマというとき」という詩に既に見受けられる。この詩で栗原は広島・長崎への原爆投下という被害的な出来事について、日本の「アジア」への加害行為（南京虐殺等）を対置させているわけだが、川口隆行はそれを「加害と被害の複合的自覚」と名付けている。このように日本のアジアへの加害行為や大田の戦中の作家活動について鋭く指摘する栗原には、ある自負があったことに間違いないだろう。一九八三年七月に刊行された『黒い卵』（人文書院）——一九四六年八月占領下の検閲によつて削除された部分を補つた完全版——で、栗原はまえがき（一九八三・五記）において、「戦争の狂気の時代にあつて、たとえ稚拙であっても醒めた目で戦争を見、反戦のおもいや原爆の惨禍を書きとどめ得たことは、若かつた日々の私の歩みの証しであり、戦後につながる根っ子である」と当時の作詩姿勢へ振り返っている。又それには、はしがき（一九四六・三記）の「私は戦時中も私の思想——自由と愛と平和の社会、非権力社会へのあくがれを純全に歌つた」という姿勢にそのまま重なってくるものだろう。年を経ても同様に述べられる一貫した反戦思想及び姿勢の表明は、「戦争の狂気」

に陥ることもなく、加害側へ立つことがなかった戦中の己の態度に対する強い自負の表れとして見受けられる。そしてそれは同じ被爆者でも、加害の側に立つた経験を持つ大田とは対照的に、一貫性を持った、非の打ち所のない言説として強力な説得力を持ちえたといえよう。加害へ視点を向ける栗原の発言は、こうした個人的状況に裏打ちされたものであるという視点も必要かもしれない。

ところで一九八二年七月、大田にとつて初めての作品集が発刊された（『大田洋子集（全四巻）』、三一書房）。これまで見てきたように大田への評価が揺れ動く中、この作品集では一体どのように大田を位置づけたのだろうか。刊行委員会には、大田の否定観への枠付けを行なつた栗原の名前と、〈史の祖〉として位置付けた長岡の両者の名前が見受けられる。二氏は各々解説を担当しているが（栗原が第三巻の戦後の主に私小説的な作品群について、長岡が第二巻の「人間檻樓」などの原爆に関する作品及び随筆について）、そこでの栗原は、大田の戦中の作家活動に対し特に非難を示してはいないものの、反対に長岡は、「人間檻樓」に対しかつて阿川弘之が示した「リアリティに乏しい上海流浪の生活の部分」との難色の理由を、「桜の国」以後の中国体験を、ついに自分なりに精算することなく終つた（と思う）事情と、無関係だとは思われない」と、暗に戦中の大田の作家活動を否定する見方を表している。又、第四巻では戦前の作品が収録されていて、浦西和彦の解説によつて大田の作家活動が「原子爆弾の被害に遭遇した直後からはじまつたのではない」ことが明言されているのであるが、作

品に見られる「自己を客観視する姿勢を避けて」しまっていることが、「時局に無批判に便乗した」との見方を附している。とすると、こういった解説群の傾向から分かるのは、この作品集の「刊行のことば」にある「もともととは自我中心的な、主観性のいちじるしい作家であった」大田が、「一九四五年八月六日、たまたま広島において、核爆弾の言語に絶するおそろしさを経験してから、転換が生じ」「飛躍的に変わっていった」という説明書きの意味する所は、正に作品集として作家をどのように位置付けようとしていたかが顕れているといえる。それは、大田の作家活動にとつて被爆体験は不可欠だったという、作家の主体よりは、原爆投下という出来事ありきの考え方といえ、更には八月六日以前の大田の仕事を一特に戦中の一暗に否定する意味を含ませていることである。栗原による作品集中の直言こそはなかったが、この構想は既に先の栗原による大田評に想定されていた。結局、大田という「二面性」を持った主体を意味付けようとする中で生じたのは、いわば〈原爆〉や被爆体験を、優位視するような言動の傾向である。それは本来忌むべきもの、起こるべきことではない〈原爆〉や被爆体験を、一作家の仕事の質の転換の為には欠かせない経験だったというような、ねじれを持った見解とも受け取ることが出来る。戦中の作家活動への否定観と作家主体の矯正としてあった原爆体験という見解は、「作品集」という作家を形象化する媒体によって、いわば決定的になってしまったのといえる。

大田洋子は「屍の街」以前に、原爆に関する小説を執筆し、発表しようとしていた―この事実には、二〇〇三年七月二五日インタ

ーネット上の aah1.com (朝日新聞系) で発表された。「河原」と題された短編(四〇〇字詰め原稿用紙五〇枚ほど)が、「屍の街」の公表より二年早い一九四六年秋に東京の芸文雑誌『小説』の創刊号に掲載予定だったのだが、GHQの検閲を意識し文中から広島や原爆といった表現を削って出版許可されていたものの、雑誌そのものが出版禁止となり、幻の小説となっていたらしい。この度、米・メリランド大学の「ブランゲン文庫」から見つかったというのだが、その後、「河原」は一九四八年二月号には掲載されたものの、大田本人には掲載の連絡がなかったらしく、大田の作品集や年譜などには記録が残されていない。

この新資料の発見によって覆されたのは、「屍の街」を大田の〈原爆文学〉執筆活動の原点とする見方である。例えば先の長岡・黒古氏は、「屍の街」序に表れた大田の作家として原爆を描くことの「使命感」を、〈原爆文学史〉の起源たらしめる大きな理由としていた。しかし「河原」の存在によって「屍の街」への意味付けはまた変わつて来るだろうし、そもそも「屍の街」の序自体も、後付されたものでしかなかったのである。というのは一九四八年一月中央公論社が出版した初出時において、まだ序は書かれておらず、一九五〇年五月の冬芽書房から再び出版された際、序は初めてその姿を現すことになる。つまり初出時にはなかった、再出版するまでに生じた思考や心情こそが、序には書かれていると考えてよい。序の発生を含めた「屍の街」の初出から再版における改稿内容を確認していくと、自らの被爆体験への捉え方や対大戦意識も変容していることが確認できる。「屍の街」は〈原爆文学〉の手本的位置に収めてしまうよりも、一人の人間の思想的

変遷や流動的な時代状況を反映した、生きた記録としての捉え直しもまた必要となってくるはずだ。これについては別稿で詳しく論じる予定である。

大田洋子研究は、その殆どが〈原爆文学〉に関わるところで進められてきたわけだが、改めて彼女の作品を再検討する必要性が感じられる。これまで述べてきたように、大田にはむしろ、〈原爆文学〉という固定化されているかのように見える枠組み自体を揺るがし、問題提起しうる存在として、浮上してくる可能性がまだ秘められているはずである。本稿は、その出発点となるささやかな序論に過ぎない。

注

1 川口隆行の「『原爆文学』という問題領域―「夏の花」「黒い雨」の正典化、あるいは『原爆文学史』―」（『Problématique II』二〇〇一・七）に興味深い指摘が見られる。「品の良い純朴な淑女」という「いわゆる『原爆乙女』の枠内」にある「黒い雨」の矢須子に対し、「怒れる太田洋子」は「慎みがない、はしたない女性として忌避された」という川口の見解は、大田への否定観にはジェンダー的な規範もまた働いていたことも示唆するものである。

2 前掲注一論文。

3 「洋子が日本帝国主義の中国侵略のさなか北支へ行き取材して書いた『桜の国』（『朝日新聞』懸賞小説当選 一九四〇年一月）や『暁は美しく』など、戦争協力の小説やエッセイ集などに苦い思いをさせられる」ものの、「問題にしたいのは彼女が原爆に被爆したことによって、文学もまた被爆し彼女が思想的にも変革されたこと」いう一文が見られる。

4 <http://www.asahi.com/top/update/phonews/0725/TKY200307250231.html>
5 「二つの『屍の街』―変容していくテキスト」と題して、『近代文学史論』四二号（二〇〇四・一二刊行予定）に掲載を予定している。

附記

本稿は「非〈原爆文学作家〉としての出発―昭和二〇年代における大田洋子と「屍の街」の再考―」（二〇〇三・一二・二〇、於・九州大学）の発表内容の一部を論文化したものである。会場内外で貴重な意見を下さった皆様に深く感謝申し上げます。また、今回の発表の機会を与えてくださった川口隆行先生、並びに発表にあたり事務局の皆様大変御世話になったことを御礼申し上げます。末筆ながら、故・花田俊典先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。